The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	公共図書館システムのAccessibilityに関する一考察 : 松原市民図書館の事例
Author(s)	山本, 慶裕
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1985, 11, p. 217-246
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4062
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

公共図書館システムの Accessibility に関する一考察

——松原市民図書館の事例——

山　本　慶　裕

公共図書館システムの Accessibility に関する一考察

——松原市民図書館の事例——

1. 問　題

1970年代以降の日本の市町村立図書館サービスの充実ぶりには，実にめざましいものがあった。各種の図書館統計が示しているように，図書館の数や登録率，貸出冊数は，この間に大はばに増加した。しかし，公共図書館が住民にとって真に身近な存在となっているかというと必ずしもそうではない。本稿は，大阪府松原市の図書館システムの利用者調査にもとづき，そのような図書館の Accessibility について考察を試みたものである。

(1) 公共図書館のシステム化

わが国の公共図書館は，明治5年，広く一般国民への公開を原則とした近代図書館として発足した。第2次大戦後，社会教育法（昭和24年）および図書館法（昭和25年）によって，公共図書館は，社会教育施設としての法的性格を与えられることになる。この図書館法によれば，図書館は「図書，記録その他必要な資料を収集し，整理し，保存して，一般公衆の利用に供し，その教養，調査研究，レクリエーション等に資することを目的とする」施設と定義づけられている。ここには，図書館の資料収集・保存機能と資料提供機能の2つが並列されているが，昭和30年代後半までは，前者の機能が優先される状況にあった。ところが，『中小都市における公共図書館の運営』報告（昭和38年）[1] によって，公共図書館の本質的機能は資料提供にあることが強調され，公共図書館の「館外奉仕」活動が積極的に行われることになった。さらに，昭和45年の『市民の図書館』報告以後[2]，伝統的な，資料保存中心の図書館像は大きな転換をせまられ，地域住民すべてに必要な資料を提供する『市民の図書館』が新しい図書館像として注目されるにいたった。この『市民の図書館』では，「貸出の充実」「児童サービスの充実」とならんで「全域サービス網づくり」の3つが図書館の政策課題として提起されている。前2者については，1970年代における急速な貸出冊数の伸展と児童利用者の増大にその成果をみることができる。しかし，「全域サービス網づくり」については，各市町村自治体における図書館数の実情をみる限り，いまだその成果が十分にあが

っているとは思えない。

この「全域サービス網づくり」について，『市民の図書館』は次のように述べている[3]。

「市立図書館はひとつの建物のことではない。全市にはりめぐらされた分館，移動図書館などからなる1つの組織である。図書館が組織であるという意味は次のとおりである。

(1) 全市民が，どこに住むだれであろうと平等に図書館サービスを受けられるように，サービス拠点をひろげる。

(2) 市民から与えられた資金を，もっとも効率よく使うためにもっとも効果的な施設配置をする。

(3) 市民が気軽に，買物かごを下げて利用できるために，分館，移動図書館など，気やすく利用できる施設を作る。

(4) 図書館長は単なる建物の管理（者）だけではなく，市民に対する資料提供サービスの責任者である。」

つまり，「全市にはりめぐらされた分館，移動図書館などからなる1つの組織」によって，図書館が「どこでも，だれでも，気軽に」利用できる施設となることが，「全域サービス網」のねらいである。

この「全域サービス網」について，『市民の図書館』ではさらに次の点が強調されている。すなわち，同一設置主体の図書館サービスポイント相互の関係と，設置主体の異なる図書館相互の関係とが区別されるべきだということである。以下本稿では，前者を「図書館システム」，後者を「図書館ネットワーク」と呼ぶことにする[4]。つまり，「図書館システム」とは，同一設置主体の有機的な関連をもった一系列の図書館サービスポイント（中央館—分館—移動図書館）全体を示す[5]。

ユネスコの図書館に関する宣言によると，公共図書館は「すべての人びとを人類の思想や知識の宝庫へ，また人類の想像力の成果へ自由に接近できるようにする主要な手段である」とされている。つまり，公共図書館は，性や年齢，学歴，職業のいかんにかかわらず，すべての人びとに開放された施設であると唱えられているのである。しかし，実際にこの理念を実現することは，決して容易なことではない。日本の公共図書館は，これまで主として学生の受験勉強の場であったし，一般の成人が利用する場合にも，その利用者は一部の男性や高学歴層に限定されるのが常であった。この点を反省して，新しく登場してきた市町村立の公共図書館は，居住の場におけるサービス網を拡充し，児童や主婦を主たる対象とするために多大の努力を重ねてきた。本稿の事例としてとりあげる松原市民図書館は，その成功例の1つである。

(2) 図書館の評価基準

公共図書館の利用に関する実証的研究として，これまでに次の4種類の調査研究がみられる。

その1つは，登録者数や貸出冊数をはじめとした図書館の統計資料の利用や職員へのインタヴューによって，図書館がどのようなサービスを行っているかを知ろうとするものである[6]。これは，図書館が提供する各種のサービスに関する統計的研究ということができる。

第2に，図書館が住民にとって利用しやすい場所に設けられているか，住民がどのように図書館を利用しているか，といった点についての住民全体を対象とした図書館利用の調査研究がある[7]。この種の調査では，必ずしも図書館の利用だけに限らず，他の公共施設と比較して図書館がどの程度利用されているか，住民は図書館に何を期待しているかといった点で住民の意識調査の形をとることが多い。

第3に，住民全般を対象としたものではなく，図書館への来館者だけを対象として行われた調査にもとづく研究がみられる[8]。この種の調査研究は，来館者を対象として，館内行動や図書館への意見をきくことにより，その結果を図書館サービスに直接還元していく方法である。

第4に，これら3種類の視点を組合わせることによって，さらに大規模な図書館調査の可能性が考えられる。実際にも，建築計画学の領域や，「モデル定住圏」に関する研究領域においてその調査報告がみられる[9]。

しかし，上記の先行調査研究のいずれにおいても多くの問題点が残されている。とりわけ，来館者調査については，次のような問題点が指摘できる。

まず第1の問題点は，調査の時期である。図書館の利用状況は，季節や天候，曜日によって，そして時間帯によっても大きく変動する。これは，図書館の貸出冊数が季節によって変動する事実にもみられるし，日曜と平日では有職者の比率が全く異なることがこれまでの調査結果に示されている。したがって，その曜日や時間帯による来館者構成の変動状況について知ることができない場合，来館者の標本抽出を正確に行うためには，すべての曜日のすべての時間帯にわたる調査を必要とすることになる。ところが，これまでの来館者調査では，この調査時期に対する配慮がほとんど払われず，そのため標本に大きな偏りがみられるのである。

第2の問題点は，来館者を対象とした調査でありながら，来館者の特性について充分な検討がなされていない点である。これまでにも，公共図書館利用者には高学歴層が多くみられるとか，利用者が有職者であるか，主婦や学生であるかによって，その利用形態が異なるのではないかといった仮説が出されているにもかかわらず，利用者の特性によって利用の形態がどのように異なるかについての分析はほとんど行われていない。しかも，この問題は第1

の問題点と深いかかわりをもつものである。

第3の問題点は，公共図書館のもつ多様な機能とその効果を評価するための，調査の理論的枠組の欠如にある[10]。これまでの図書館学の重点は，書誌学，分類整理学かもしくは歴史哲学的研究におかれ，図書館をめぐるその他の現象の解明はもっぱら実践論に譲られてきた。そのため，調査研究の枠組は経験的に構成され，何らの理論的反省もみられないのが現状である。

ここにとりあげる松原市民図書館調査は，以上のような反省をふまえて実施されたものである。本稿ではその結果の分析枠組として，E. Evans の図書館評価の規準を用いることにする。Evans らは，1970年までに発表された図書館の効果測定に関する文献を500以上調査し，図書館の評価規準となる概念を次の6つに分類・整理している[11]。

1. アクセス（接近）の可能性（Accessibility）

利用者が，図書館およびその所蔵資料にどの程度容易にアクセスできるかということ。

2. 費用（Cost）

サービス提供に伴う費用であり，図書館スタッフの人数や資質も含めて考えられている。

3. 利用者満足(User Satisfaction)

利用者が図書館を利用することでどの程度満足したか，ということ。利用者の図書館内での行動の種類や程度，資料利用の容易さなどがあげられている。

4. 所要時間（Response Time）

利用者の各種の要求に対してどれだけ速くサービスできるか，その所要時間を示す。

5. 費用対便益費（Cost/Benefit Ratio）

費用の総額と提供されるサービスとの比率，利用者あたりの全サービス費用の比率，所要時間経費あたりの一定のサービス比を示すが，「費用」と「便益」の定義づけや算定方法がかなり多様なため，多くの問題を伴う。

6. 利用（Use）

図書館利用そのものを何らかの単位を用いて測定しようとするもの。典型的な指標として，来館者数，登録率，貸出冊数やレファレンス件数などがあげられる。

Evans らの研究の特徴は，図書館評価の規準を職員，利用者，住民の3者の視点からとりあげたことにある。この6つの規準概念の中で，Evans らがとくに重要であると指摘する規準概念は，Accessibility である。Evans らは，このアクセスの問題については少くとも2つの局面があるとしている。それは，文献という物理的目標物を検索し入手するプロセスにかかわる「物理的アクセス」（時間や費用）と，利用者の特徴（性，年齢，職業，居住

地等）によってサービスの利用しやすさに差異が生じる場合の「利用者アクセス」の2つである。しかも，この2局面について Evans らは，これまでの諸研究が前者に重点を置いてきたことを反省し，後者について，より広い利用者層へとサービスを拡大する必要性を主張している。そこで，本稿では「利用者アクセス」に焦点をあて，利用者の特徴によって，松原市民図書館のサービスの利用しやすさにどのような差異が生じるか，また，どのような要因がサービスの利用に影響を及ぼすか，について考察することにしたい。

2．松原市民図書館調査

(1) 松原市民図書館の特徴

松原市は，大阪市の南に隣接する，人口13万6千人（1983），面積16.6km^{2}の都市である。この都市を調査対象として選んだ理由は，主として次の2点にある。第1の理由は，松原市の図書館があらゆる指標において大阪府下にとどまらず，全国的にみてもトップレベルのサービスを提供しているからである。1983年度には，蔵書冊数24万6千冊，人口1人当りの貸出冊数4.7冊，人口1人当りの図書購入費は204円に達し，登録率は19%に及んでいる[12]。しかも，この登録率は，過去1年以上にわたる累積登録を行っている市を除けば，大阪府下で2位，「人口10万人以上20万人未満」の都市では全国で4位となる。第2の理由は，松原市が財政的にも市民の特性からみても，図書館を拡充する上で有利な条件を備えていないことにある。一般の読書調査や世論調査では，高学歴層ほど読書活動は活発であり，学歴構成の高い自治体ほど公共図書館の利用率が高くなる傾向がある。ところが松原市の学歴構成をみる限り，高学歴層の比率は決して高くない。にもかかわらず，松原市の図書館活動がなぜ活発なのか，その原因を分析することが1つの重要な研究課題となったからである。

松原市の図書館活動は，1970年の「雨の日文庫」（家庭文庫）の発足により始まった。図書館は建物でなくシステムであるという認識のもとに，1974年自動車図書館が発足し，1977年「松原市民図書館条例」が制定され，図書館システム「松原市民図書館」が正式に発足した[13]。（「松原市民図書館」とは松原市の図書館システム全体を示し，地域館の1つであるとともに中央館的な役割を果たしている「松原図書館」とは区別される）。調査時点（1983年9月）における「松原市民図書館」は，地域館3，分館1，分室3の7つの固定施設と，自動車図書館1台（サービス・ステーション18カ所）とから構成されている。また，このシステムを支える職員は，正規職員22名（うち技術員を除く全員が司書資格を有する）と，嘱託，アルバイト，パートの11名との計33名である。

松原市の図書館サービスは1つの図書館システムとして展開されている点に，大きな特徴がある。このサービスのシステムの特徴として，次の4点があげられる。

第1の特徴は，松原市の図書館サービス網が，施設の適正利用圏と市民の生活動線を考慮して市民に利用しやすいものとなるよう計画され，その計画が段階的に実行されてきたことである。

第2の特徴は，松原市民図書館の蔵書が各館固有の蔵書ではなく，各サービスポイントの借出要求に応じて提供されるシステムの蔵書になっていることである。

第3の特徴は，システム全体に共通した登録方法と貸出方法が採用され，図書の貸出しと返却がシステム内のどのサービスポイントにおいても容易に行えることである。

第4の特徴は，リクエストサービスである。借出しにあたって，利用者の求める本がない場合，利用者はリクエストサービスを利用することによって，求める図書を手に入れることができる。利用者が申込んだリクエストカードは，松原図書館で毎朝開かれるスタッフのミーティングの際に集められ，検索が行われる。予約された図書がシステム内の蔵書にある場合は，配本車が予約を受けたサービスポイントにその図書を配送する。貸出し中の場合は，予約待ちの手続がとられる。また，システム内に予約された本がない場合は，図書館間協力によって府立図書館や近隣の市立図書館から借出されるか，または新たに購入される。予約申込者には，本が手に入り次第電話や葉書による通知がなされている。

松原市民図書館は，以上の組織的なサービスを行うことによって，利用者の要求に適確にかつ効率的に応えようとしている。今回の調査は，この松原市民図書館への来館者を対象として行った質問紙調査である。

(2) 調査の概要

1983年の9月16日から9月22日までの1週間，「松原市民図書館」（地域館，分館，分室，

第1表 調査期間（1週間）中の来館者数

	来館者総数	小4以下 (%)	調査対象者 (%)
松原図書館	3,012	1,022 (34)	1,990 (66)
天美図書館	1,498	635 (43)	863 (57)
恵我図書館	1,423	831 (59)	592 (41)
松原駅前分館	355	168 (48)	187 (52)
三宅分室	172	127 (74)	45 (26)
新町分室	232	137 (59)	95 (41)
天美分室	57	26 (46)	31 (54)
自動車図書館	705	451 (64)	254 (36)
計	7,454 (100)	3,397 (46)	4,057 (54)

自動車図書館）への来館者のうち，調査票に回答可能な小学校5年生以上の者すべてを対象として調査を実施した[14]。調査票の配布数は，全体で4,057にのぼり，そのうち有効回収数は3,867，回収率は95%となった。曜日や時間帯，サービスポイントによる回収率の差はみられない。

この調査票の配布と同時に，小学校4年生以下の来館者の延べ人数を記録した。第1表は，来館者の全数と，来館者全体にしめる回答者の比率を示している。小学校4年生以下の来館者の比率は，館によってかなり異なる。三宅分室（74%）がもっとも高く，自動車図書館（64%）がこれに続いている。他方，その比率がもっとも小さいのは，松原図書館（34%）であり，天美図書館（43%）がこれに続いている。蔵書冊数が多いほど成人比率が高くなる傾向にあるが，例外もあり，一般化はできない。今回の調査は調査票への回答能力を考慮して対象を小学校5年生以上に限定したが，そのため館によって5割以上の来館者が除外される結果となった。さらに，調査期間が1週間にわたるものであったため，2度以上の重複来館者がみられた。重複来館者に対しては，基本的属性部分についてのみ再度調査票への記入を求めることにし，集計段階でその区別を行った。回答者総数のうち重複回答者は11%を占めるが，館や時間帯による差はみられなかった。

(3) 来館者の特徴

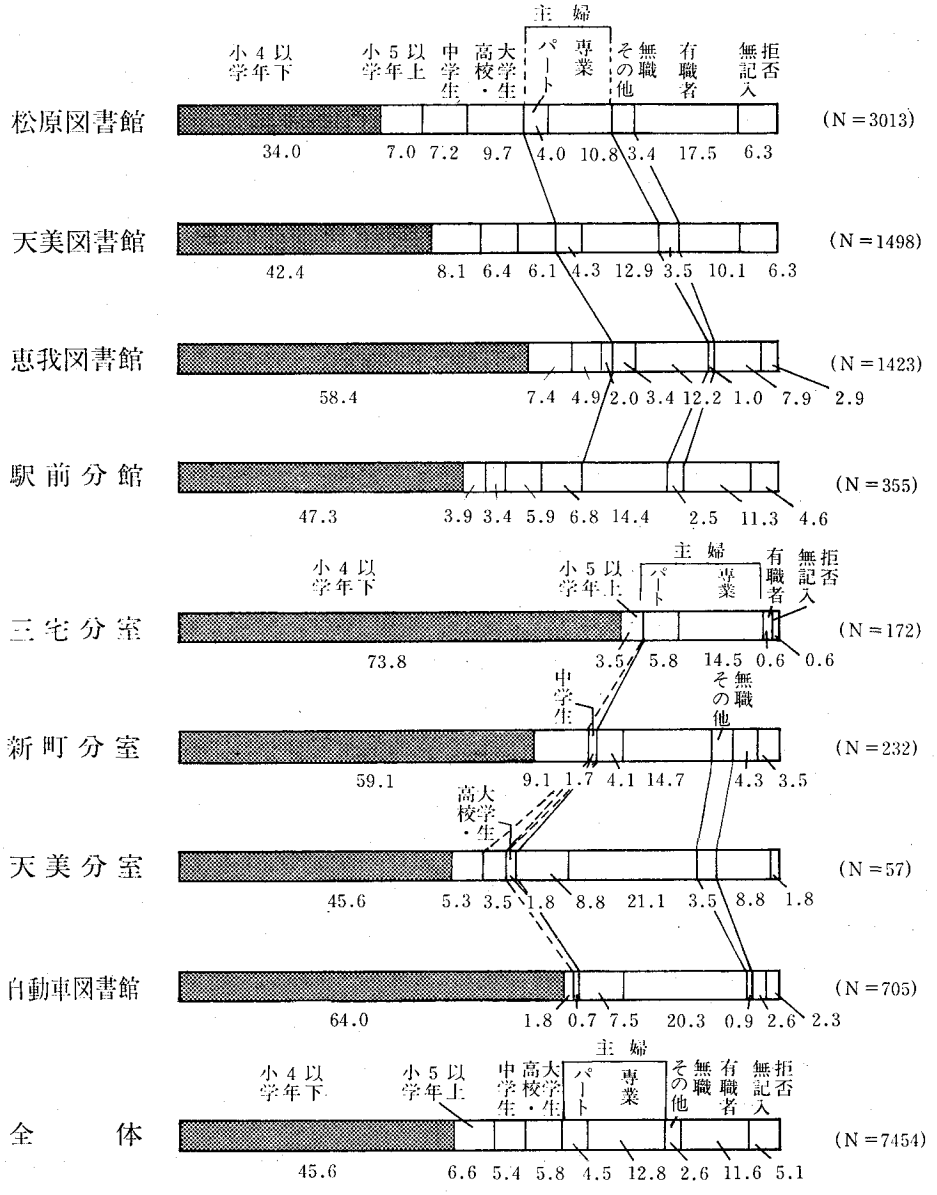
A．基本的属性

第1図は，1週間あたりの来館者数の就業状況を示したものである。来館者の中でもっとも多いのは小学生と幼児（52%）であり，これに主婦（17%）が続いている。主婦の比率を館別にみると，天美分室が30%，自動車図書館が28%と多く，もっとも少ない松原図書館でもその比率は15%となっている。この主婦層（17.4%）のうち，専業主婦は12.8%であり，パート・家業従事の主婦が4.5%となり，パート・家業従事者は主婦層の4分の1を占めている。主婦層についで多いのは，有職者層の12%，「中学生」および「高校生・大学生」の11%であり，それに「その他の無職」（3%）が続いている。有職者の中では，事務職（4%），販売・サービス職（3%），自営業（1%）が多くみられた。館別にみると，各分室，自動車図書館，それに恵我図書館の来館者の半数以上が小学生や幼児によって占められている。これに対し，松原図書館は小学生や幼児だけでなく，有職者，中学生，高校・大学生がかなりのウエイトを占めている。また，天美図書館，駅前分館の来館者構成も小学生以下が半数を占めながらも，かなり多様な層がみられる。

第2図は，小学校4年生以下を除く来館者（回答者）について，職業構成を曜日・時間帯別に示したものである。まず，平日では，午前中は主婦と有職者の利用率が高いが，午後には小学生や学生の利用率がふえる。ただし，午前に比べて午後の来館者数は倍近くみられる

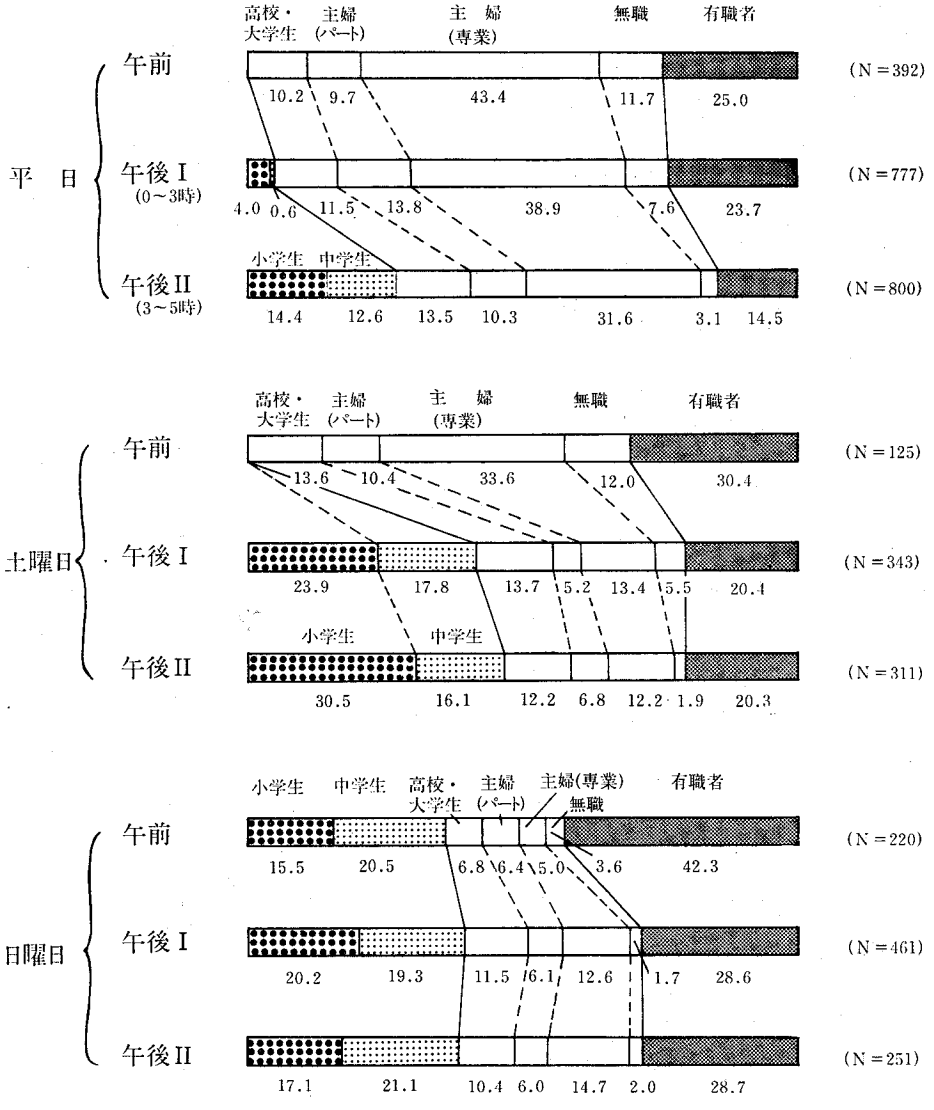
ため，実数の上では主婦や有職者の利用は午後になるほど高くなっている。曜日別にみると，小学生，中学生の利用は，月曜から土曜までは放課後の時間帯に集中しているが，日曜日には各時間帯にほぼ均等な分布がみられる。一方，小学生や中学生が来館できない曜日以外の

第1図　来館者の就業状況



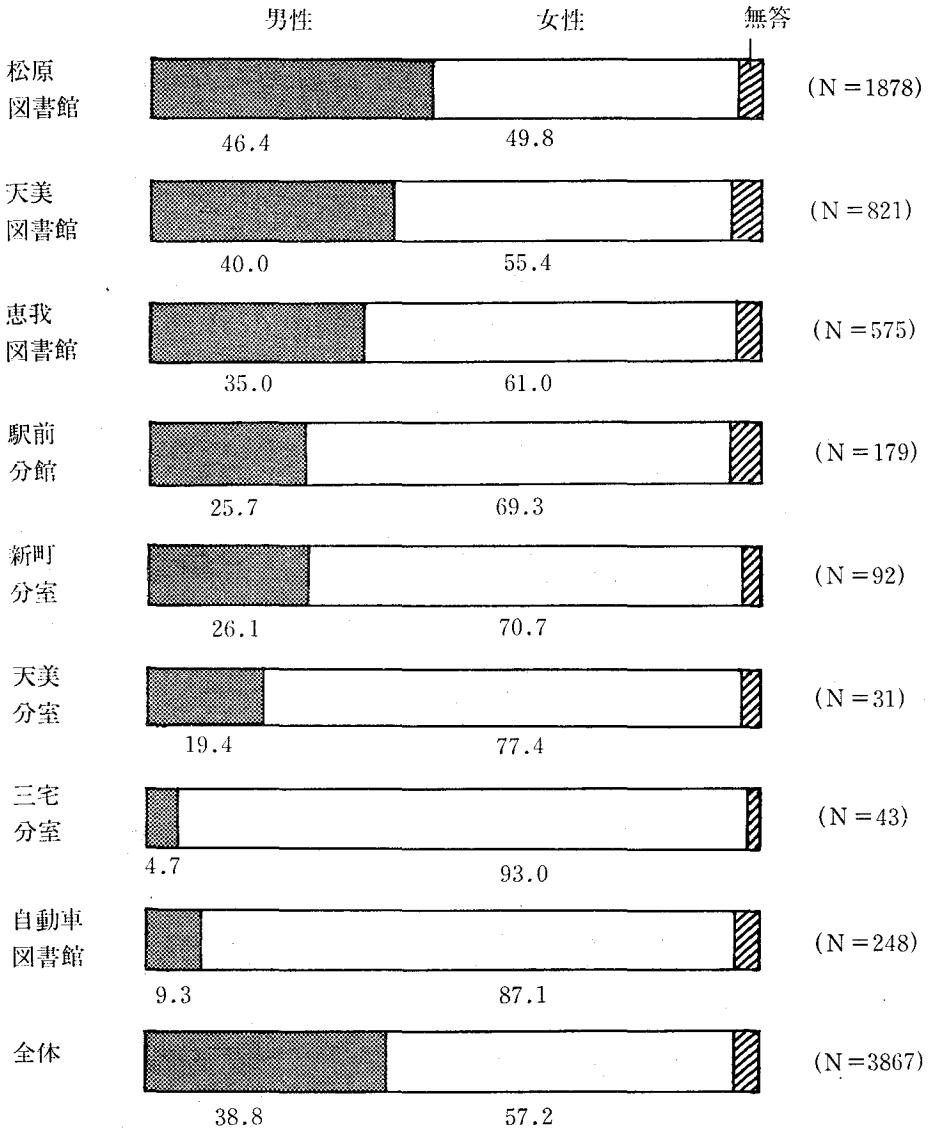
午前の時間帯は，主婦が来館者の中心となり，有職者がそれに続く。他方，日曜日には，どの時間帯においても主婦（とくに専業主婦）の比率が減少し，児童や学生，そして有職者が圧倒的に多くなっている。とりわけ，有職者にしめる土曜，日曜の来館者は55%に達しており，有職者の半数以上がウィークエンドに図書館を利用している。

第2図　曜日別・時間帯別就業状況



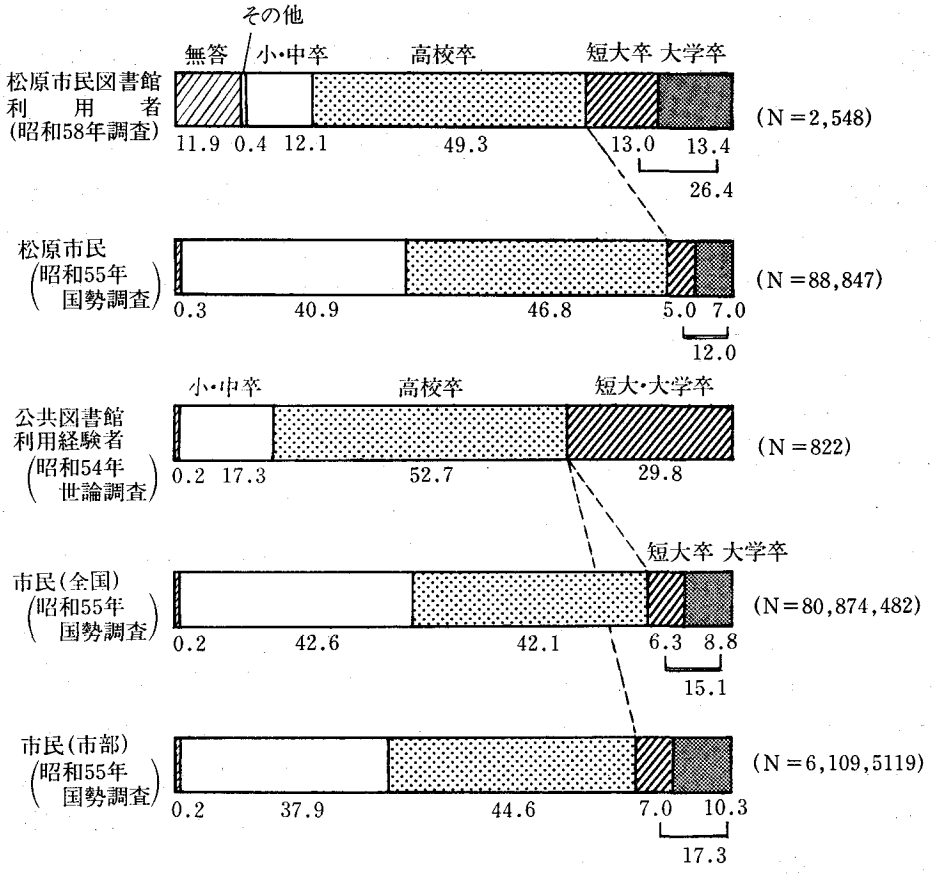
第3図に示したように，来館者の男女別構成は，女性6割，男性4割であるが，各館の男女比はかなり異なる。女性の比率は，松原図書館が5％にとどまっているのに対し，自動車図書館や三宅分室では90％前後となっている。全体に，地域館，分館，分室と規模が小さいほど女性の比率が増大している。自動車図書館や分室の方が，幼児をつれた母親のような，行動半径の小さい来館者にとって利用しやすい場所で開かれているからではないかと考えら

第3図　性別構成



れる。しかし一方でこの男女別比率は，各館の開室日と就業状況の男女差を考慮して解釈する必要がある。来館者中に占める女性の比率を曜日別にみると，平日66%，土曜55%，日曜50%となり，週末より平日の方が女性比率が高い。これは，主婦の平日利用の頻度が高いという理由がある一方，男性のほとんどが有職者か学生であるために，週末しか図書館を利用できない男性が多いことにもよっている。一方，分室や自動車図書館は平日に開室され，週末には閉室となる。その結果，分室と自動車図書館に女性が多く，地域館の男性の利用率が高くなるのであろう。来館者の年齢構成を市民と比較すると，10代，20代，そしてとくに30代の年齢層が多くみられるのに対し，40代以上の来館者率は，市民の年齢構成比より低くなっている。しかも，男女別にみると，30代の年齢層がとくに多いのは女性であり，男性にはあまりみられない。この傾向は各館に共通しているが，地域館よりも分室や自動車図書館になるほどその傾向は顕著である。児童および幼児の利用者を除けば，来館者中に占める30代

第4図　来館者の学歴構成



の比率が高いという結果は，最近の図書館利用者調査に一致してみられる傾向である。

第4図は，学生を除く来館者の学歴構成を示したものである。大学卒業者と短大卒業者がそれぞれ13%を占め，高校卒業者が49%，小・中学卒業者が12%，無答が12%である。松原市民中に占める短大・大学卒業者の比率（昭和55年国勢調査）は12%であり，来館者に占める短大・大学卒業者の比率はその2倍となっている。

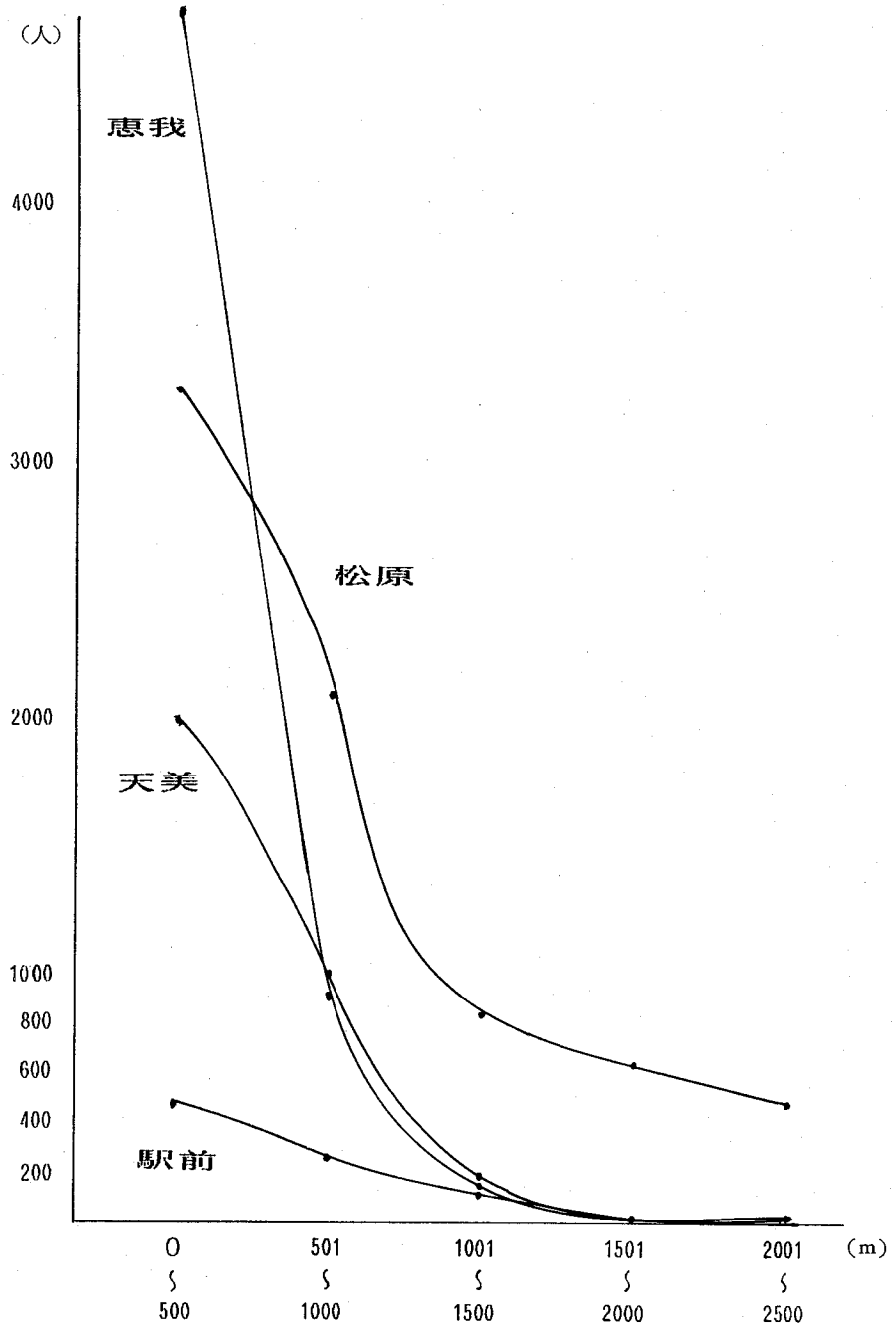
市民との間のこの学歴差の原因の1つとして，図書館来館者中に占める若年層の利用率の高さがあげられる。そこで，来館者の学歴構成を性別・年齢別に松原市民の学歴構成と比較したが，男女ともに，各年齢層において，やはり来館者の学歴は市民より高くなった。そのため，来館者の年齢層が若いことが原因で市民全体と来館者との間に学歴差が生じたと解釈することはできない。第2の理由として，住民の中の読書層の特性による影響が考えられる。住民の中の高学歴層がとくに読書に親しむために図書館利用者の学歴も高くなるのではないかと推察される。毎日新聞社の読書世論調査（1982）でも，一般市民の読書率は高学歴層ほど高いという結果が示されている。（中卒の読書率45%，高卒78%，大卒89%）ただし，この点については松原市の資料がなく言及できない。第3の理由として，公共図書館利用者の学歴が高いのは全国的現象であり，松原市もその例外ではないと考えられる。第4図に示したように，短大・大学卒業者の比率は，全国では15%であるのに対し，公共図書館利用経験者では30%である。公共図書館利用経験者の学歴はかなり高く，全国の短大・大学卒業者の2倍の比率になっている。松原市民図書館利用者の短大・大学卒業者の比率（25%）は，全国の公共図書館利用者と比較するとわずかに低い。しかし，松原市民全体の学歴が全国ほど高くないことを考慮すれば，やはり松原市の場合も全国の例にもれず，図書館利用者の学歴は高いとみなされる。

B．地理的分布

来館者の特徴として，最後にその地理的分布について検討する。それによって，図書館が来館者にとってどの程度利用しやすい位置に設置されているかが示される。利用者の登録はシステム全体で行われているため，各施設ごとの登録率の分布とそのサービス圏をみることはできない。そこで調査の結果から，各固定施設について，来館者の自宅からの距離別分布図を作成した。

まず，松原図書館の場合，自宅からの直線距離が「500 m 以内」から来館した者が25%，「501～1,000m」が34%，「1,001～1,500m」が20%，「1,501～2,000m」が11%，「2,001m以上」が10%であり，来館者の絶対数の比率からみると遠方からの来館者も多く，距離は無関係のようである。しかし，上記の4つの距離圏内の人口規模が全く異なるのでこの点を考慮する必要がある。そこで，各距離圏内の来館者数を「人口10万人あたりの来館者数」に換算すると，「500m以内」3,287人，「501～1,000m」2,044人，「1,001～1,500m」824人，

第5図　距離別にみた人口10万人あたり来館者数



「1,501～2,000m」633人，「2,001m以上」466人となり，図書館からの距離が大きくなるにつれて，来館者数が減少している。その比率も，「500m以内」を100とすれば，「501～1,000m」62，「1,001～1,500m」25，「1,501～2,000m」19，「2,000m以上」14と急激に減少していることがわかる。第5図は，来館者数と距離の関係を各地域館ごとに示したものである。館によって来館者数の減少傾向は全く異なるが，どの館においても，館からの距離が1kmを境界として来館者がほとんどみられなくなる点は共通している。松原図書館のみ，1kmをこえてもかなりの利用者がみられるが，これは，松原図書館がシステム内で中央館的役割を担っているためと考えられる。一般に，この距離1kmは，図書館の「適正利用圏」とよばれている。

各サービスポイントまでの所要時間についてみると，地域館では，「5分以内」が30%，「10分以内」が32%，「20分以内」が21%であり，分室では，「5分以内」が54%，「10分以内」が30%，「20分以内」が6%となって，地域館では来館者の83%が20分以内の距離から，分室では実に90%が20分以内の距離から来館している。自動車図書館ではさらに所要時間が短くなり，来館者の実に83%が「5分以内」の距離範囲内から利用しているのである。来館方法についてみると，地域館では「自転車」が60%，「徒歩」が20%，分室では「自転車」が54%，「徒歩」が40%であり，自転車と徒歩による来館者がきわめて多い。とくに自動車図書館の場合には「徒歩」が68%，「自転車」が27%となり，その順位が逆転するだけではなく徒歩でくる来館者がほとんどであることがわかる。

以上の結果からみる限り，松原市民図書館は，時間的にみても，距離的にみても，きわめて利用の容易なシステムになっていることがわかる。しかし，一方でその来館者の特徴は，サービスポイントによって差異がみられることも指摘された。次に，このシステムの利用しやすさに，どのような来館者の特徴が影響を与えるかについて考察する。

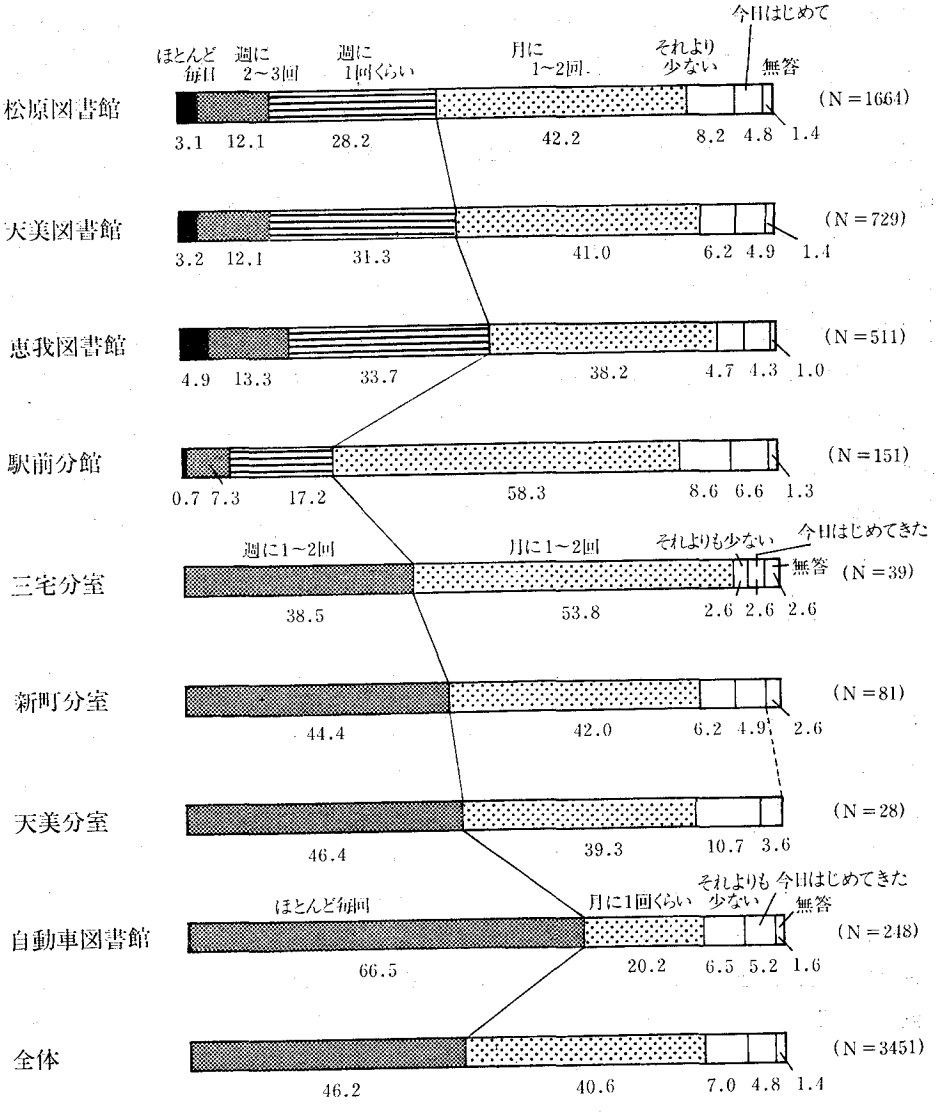
3．サービス利用の規定要因

(1) 方　法

利用者のアクセスには，図書館の認知，来館，資料の発見，資料の入手といった利用の段階が想定される。したがって，それぞれの段階に応じたサービス内容があり，サービスの利用しやすさについても，図書の配列や貸出し方法といった館内サービスに関する利用しやすさだけではなく，広い意味では地域の住民に図書館の所在や利用方法がどの程度知らされているか，といった広報サービスから，住民層の中でどのような層の人々がどの程度図書館を利用できているか，といった点までも含めて考える必要があるだろう。さらに，各地域への図書館設置率や司書数など図書館システムそのものの充実度もまたサービスの利用しやすさ

の指標となりうる。しかし，今回の調査データが図書館来館者を対象として収集されたものであるという制約上，本稿では，利用者の来館後のサービスに焦点をあてることにしたい。ここでは，図書館サービスの利用の容易さ（Accessibility）を評価する尺度として，①図書館の来館頻度，②図書館からの月平均借出冊数，③予約サービスの利用経験率の3つのサービス利用率を採用する。これらの3つの利用率に影響をおよぼす要因の検討から，利用者の特徴によってサービスの利用しやすさに差異が生じているか否か，について考察を行う。

第6図　図書館の来館頻度



この3変数を用いた理由は，第1に，松原市立図書館においては，他のサービスと比較して貸出しサービスと予約サービスにかなりの重点がおかれていることがあげられる。第2に，上の2つのサービス利用は，利用者の図書館利用の頻度によって，かなり規定されるのではないかと予想される。すなわち，3つの変数の間に，「来館頻度の増大→借出冊数の増大→予約サービス利用の増大」という因果関係を想定できるからである。さらに，第3の理由として，これらのサービスの利用率は図書館のシステム化と強い関係にあることが予想されるからである。図書館のシステム化により，先の因果関係とは逆に，「予約サービスの充実→借出冊数の増大→来館頻度の増大」という関係を設定できるのではないだろうか。

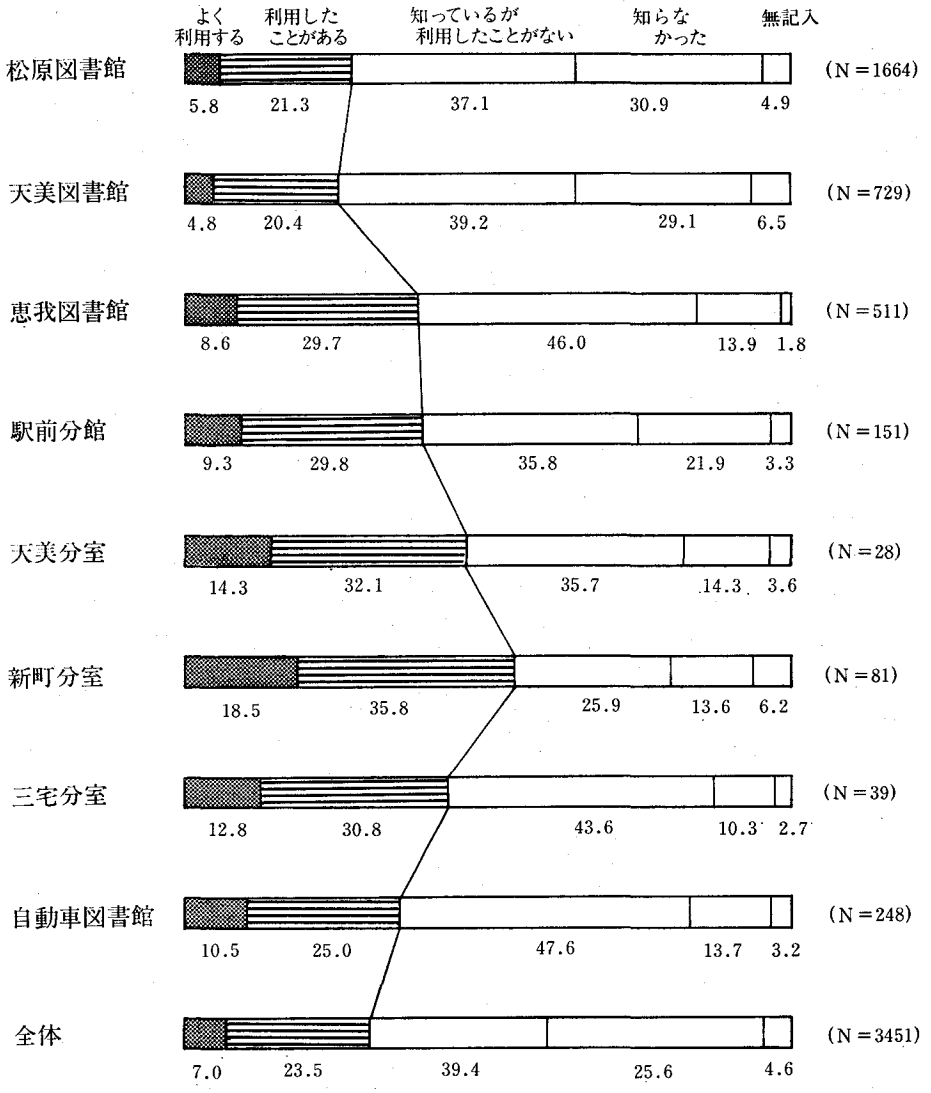
第6図，第2表，第7図は，3つのサービスの利用率についての調査結果を示したものである。図書館の来館頻度が開館日数によって異なるため，地域館（分館），分室，自動車図書館の3者のカテゴリーには異なったものを用いた（開館日数は，地域館が日曜の開館を含めて週6日，分館が週5日で平日のみ，分室は平日で週2日開室されている。また，自動車図書館は各ステーションを月2回巡回する）。第6図に来館頻度をみると，地域館では「月に1～2回」利用する者がもっとも多く，4割近くを占める。これに，「週1回くらい」の利用者が約3割と続いている。ただし，「週1回以上」の利用者としてみれば，「月1～2回」の利用者よりも多くなり4割強を占める結果となる。一方，分館利用者の来館頻度は地域館より少ないが，開館日数が地域館より少なく，日曜に開館されていないために来館頻度が少なくなるのは当然の結果と考えられる。分室の利用頻度をみると，週2回の開室にもかかわらず，「週に1～2回」の利用者が39～46％という高い比率になっている。また，自動車図書館の利用者は，「ほとんど毎日」利用する者が67％とやはりかなり高い頻度の利用がみられる。

第2表　借出冊数　　(%)

	松原	天美	恵我	駅前	天美	新町	三宅	全体
借りたことがない	8.5	5.6	6.8	4.0	7.1	3.7	0.0	7.1
今回はじめてかりる	1.8	1.9	1.6	3.3	0.0	0.0	2.6	1.9
月に1冊より少ない	8.7	9.1	4.7	6.0	10.7	1.2	2.6	7.7
月に1～2冊	13.4	10.6	10.8	9.9	10.7	9.9	10.3	12.0
月に3～5冊	26.9	29.2	25.0	30.5	25.0	32.1	28.2	27.4
月に6～9冊	17.4	20.0	21.7	21.2	21.4	18.5	20.5	19.0
月に10冊以上	20.6	20.9	27.6	23.8	21.4	30.9	35.9	22.4
無記入	2.8	2.7	1.8	1.3	3.6	3.7	0.0	2.5
N	1,664	729	511	151	28	81	39	3,203

借出冊数をみると，「全体」では「月に10冊以上」借りる者が22%，月に3冊以上借りるものが7割近くみられる。これに対し，「借りたことがない」ものはわずか7%であり，また「月に1冊より少ない」ものも8%にすぎない。月あたりの借出冊数はきわめて多く，来館者による図書の貸出が頻繁に行われていることがわかる。館別にみると，地域館ほど「借りたことがない」ものの比率が高く，とくに松原図書館でその利用者の比率が高い。松原図書館の場合，月に3冊以上借りる利用者の比率がもっとも少ないが，これは，松原図書館を

第7図　予約サービスの利用経験



はじめとする地域館ほど，貸出しサービス以外の主催行事や集会が多く開かれるほか，雑誌や新聞の館内閲覧が可能となっているためである。実質的な貸出冊数においては，地域館が分室よりはるかに高い業績を有している。

最後に，予約サービスの利用経験をみると，次のような特徴がみられた。すなわち，地域館に比べ，分室や自動車図書館ほど利用経験者の比率が高いのである。「よく利用する」者と「利用したことがある」者の比率の合計は，地域館と分室が29％であるのに対し，分室が50％，自動車図書館が36％である。この結果は，各サービスポイントの蔵書量と関係があると推察される。分室や自動車図書館の蔵書量が少いために，それぞれのサービスポイントにおける予約サービスの利用率が高くなるのではないだろうか。他方，予約サービスについて「知らなかった」利用者は，松原図書館（31％）と天美図書館（29％）に多い。いずれもかなり蔵書冊数の多い図書館である。以上の3つのサービス利用率がどのような要因によって規定されているかを解明する手法として，情報量基準（AIC）によるカテゴリカルデータ解析の方法を採用した[15]。目的変数としては3つのサービス利用率をとる。分析のねらいは，第1に，説明変数として，最大の情報量を有する変数を発見することであり，第2に，サービス利用の規定要因と考えられる基本的属性が目的変数に対してどの程度の情報量（AIC）を有するかを検討し，それによって，調査で採用した全ての変数にしめる基本的属性の相対的影響力を考察することにある。規定要因の分析方法としてこれまでは，基本的にはクロス表の分析から，多変量の場合には回帰分析や林の数量化の方法などがとられてきた。しかし，これらの方法では説明変数の量が計算上限定されており，調査で得られた多くの変数の中から重要な説明変数を選択するにあたって，経験的な判断に依存するところが大きい。情報量基準によるデータ解析の方法を導入した理由は，この経験的判断をさけ，できる限り客観的な手段による変数の選択を行うためである。ここでは，回答者が多く，今後の図書館活動でも重要な役割を果たすと考えられる3つの地域館を分析の対象とする。各地域館の回答者から重複回答者を除くと，回答者総数は，松原図書館が1,664名，天美図書館が721名，恵我図書館が511名となる。分析に用いる変数の数は，調査票の自由記述部分を除く116項目である。

(2) 結果と考察

松原図書館の場合について，3つのサービス利用率の説明変数を20番目までリストアップしたものが第3表，第4表，第5表である。「来館頻度」を目的変数としてみた場合，最も関連の大きい（最大エントロピーの）変数は，「借出冊数」である。第2位の「職業」との差はかなり大きく，他の変数に比べて，「借出冊数」の効果がきわめて大きいことが示されている。第3位に「予約サービスの利用経験」があがっており，3つのサービス利用率の関連の強さがすでに示されている。上位20位のうち，基本的属性としては，「職業」「年齢」

「学歴」がこの順にみられる。4位にあがった「借出方法の困難さ」のクロス表によると，来館頻度の多いものほど借出方法が簡単と答え，少ないものほど困難と答える傾向にある。

「借出冊数」を目的変数とした場合には，「来館頻度」の情報量が最も多く，前の結果と一致している。第2位の「本をかりた」（図書館内この行動結果）は，当然予想された結果であるが，「来館頻度」の方がこの項目以上に強い関連をもつことに注意する必要があろう。第3位の「“かわちもめん”」は図書館と文庫連絡会によって作成されたパンフレットであるが，借出しを多く行うものほど，この冊子の認知度や利用経験が高くなっている。第4位，第8位，第11位の項目は，いずれも借出しサービスに対する意見項目であり，「来館頻度」を目的変数とした場合よりもその関連度が大きい。また，「予約サービスの利用経験」は，「来館頻度」を目的変数とした場合に比べて順位が低いが，実質的な情報量は多くなっており，「来館頻度」との関連以上に，「借出冊数」との関連が大きいことがわかる。一方，基本的

第3表　「来館頻度」の説明変数リスト（松原図書館）

順位	説明変数	カテゴリー数	AIC	DIFFERENCE OF AIC
1	借出冊数	8	−507.14	0.
2	職業	8	−127.56	379.57
3	予約サービスの利用経験	5	−119.94	7.62
4	借出方法の困難さ	4	− 96.46	23.48
5	本を借りた	2	− 90.01	6.45
6	年令	9	− 87.03	2.98
7	借出冊数の変更希望	4	− 86.53	0.51
8	借りていた本を返すため	2	− 79.30	7.23
9	“かわちもめん”の利用経験	5	− 64.63	14.67
10	松原図書館の利用経験	2	− 61.54	3.09
11	学歴	6	− 58.99	2.55
12	借出期間の変更希望	5	− 55.70	3.29
13	開館時刻の変更希望	4	− 48.71	6.99
14	本を読むため	2	− 47.22	1.49
15	特集コーナーの認知	3	− 44.16	3.06
16	たのしい（イメージ）	2	− 38.83	5.33
17	験前分館の利用経験	2	− 37.04	1.79
18	新刊書の手に入れやすさ	4	− 35.83	1.21
19	行事の認知（図書館の掲示やポスター）	2	− 34.23	1.60
20	本を読んだ	2	− 31.96	2.27

属性として20位内にあるのは，「居住年数」「年齢」「職業」であるが，いずれの情報も2桁と減少した上に，順位もかなり低くなっている。

「予約サービスの利用経験」を目的変数とした場合には，上位20位内の基本的属性としては，「居住年数」がみられるのみである。一方，第1位は，図書館冊子「“かわちもめん”の利用経験」である。“かわちもめん”の利用が予約サービスの利用に結びついているのか，あるいはその逆の関係であるのか判断はできない。しかし，それぞれのサービス利用の深い関連を確認できる。第2位の「借出冊数」との関連は，やはり「来館頻度」より大きく，「来館頻度」→「借出冊数」→「予約サービス」の3つのサービス利用率はこの順序で関係をもつと考えられる。さらに，注目されることは，上位20位内に「行事の認知」と「行事の参加経験」に関する項目数が増加したことである。「行事の認知」「行事の参加経験」に関する項目数は，「来館頻度」で1項目，「借出冊数」の3項目に続き，7項目がみられる。

第4表　「借出冊数」の説明変数リスト（松原図書館）

順　位	説　明　変　数	カテゴリー数	AIC	DIFFERENCE OF AIC
1	来館頻度	7	−481.32	0.
2	本をかりた	2	−377.77	103.55
3	“かわちもめん”の利用経験	5	−292.28	85.50
4	借出方法の困難さ	4	−219.13	73.15
5	予約サービスの利用経験	5	−205.14	13.99
6	借りていた本を返すため	2	−171.53	33.60
7	何かおもしろい本があれば借りようと思って	2	−143.04	28.49
8	借出冊数の変更希望	4	−123.51	19.53
9	行事の認知（知らなかった）	2	−118.28	5.23
10	居住年数	5	− 78.80	39.48
11	借出期間の変更希望	5	− 77.22	1.58
12	めあての本をかりるため	2	− 69.07	8.15
13	行事の認知（“かわちもめん”をみて）	2	− 68.32	0.75
14	行事の認知（図書館の掲示やポスター）	2	− 62.21	6.12
15	特集コーナーの認知	3	− 50.00	12.20
16	開館時刻の変更希望	4	− 49.76	0.24
17	くらい（イメージ）	2	− 44.57	5.19
18	松原図書館の利用経験	2	− 42.62	1.95
19	年　令	9	− 39.17	3.44
20	職　業	8	− 37.61	1.57

以上の分析結果では，説明変数の次元数が1つであるという前提に立ってきた。次に，説明変数が2次元以上の場合の最適な変数の組合せについてその情報量（AIC）をみた。その結果，目的変数が「来館頻度」の場合，第1位が「借出冊数」と「本を借りた」(—511) であり，第2位が「借出冊数」1項目（—507）であった。これは，第3位に「借出冊数」と「本を読むため」（来館目的）があることにもみられるように，図書館の利用頻度が「本を読み，借りる」という図書館の本質的機能と深いかかわりをもつことを示している。「借出冊数」の場合は，第1位が「来館頻度」と「本を借りた」(—772) であり，第2位には「来館頻度」，「本を借りた」と「行事の認知（知らなかった)」(—661) の3つの変数がある。変数が1次の場合に9位であった「行事の認知（知らなかった)」(借出冊数が多いほど無答者が増大）の項目が上昇している。「予約サービスの利用経験」の場合は，「“かわちもめん”の利用経験」と「本を予約した」(—310) が第1位，これに「本を借りた」が加わった3変

第5表　「予約サービスの利用経験」の説明変数リスト（松原図書館）

順位	説明変数	カテゴリー数	AIC	DIFFERENCE OF AIC
1	“かわちもめん”の利用経験	5	−253.48	0.
2	借出冊数	8	−182.18	71.30
3	行事の認知（知らなかった）	2	−115.51	66.67
4	来館頻度	7	−106.25	9.26
5	本をかりた	2	− 96.22	10.03
6	本を予約した	2	− 88.19	8.03
7	行事の認知（“かわちもめん”を見て）	2	− 84.40	3.80
8	行事の認知（図書館掲示やポスター）	2	− 74.79	9.60
9	めあての本をかりるため	2	− 63.49	11.30
10	特集コーナーの認知	3	− 61.68	1.82
11	図書館の認知（他の図書館）	2	− 40.80	20.87
12	かりていた本をかえすため	2	− 35.07	5.73
13	何かおもしろい本があればかりようと思って	2	− 32.59	2.48
14	借出方法の困難さ	4	− 25.33	7.26
15	居住年数	5	− 22.11	3.23
16	行事の認知（広報まつばらを見て）	2	− 21.61	0.49
17	行事の認知（子ども文庫）	2	− 20.39	1.22
18	おはなし会・読みきかせ会の参加経験	2	− 20.30	0.09
19	児童文学講座の参加経験	2	− 20.28	0.02
20	本をさがしたがみつからなかった	2	− 20.06	0.23

第6表 属性の AIC

目的変数														
来館頻度					借出冊数					予約サービスの利用経験				
順位	説明変数	カテゴリー数	AIC	DIFFERENCE OF AIC	順位	説明変数	カテゴリー数	AIC	DIFFERENCE OF AIC	順位	説明変数	カテゴリー数	AIC	DIFFERENCE OF AIC
2	職業	8	−127.56	.0	10	居住年数	5	− 78.80	.0	15	居住年数	5	− 22.11	.0
6	年齢	9	− 87.03	40.53	19	年齢	9	− 39.17	39.63	52	性別	3	− 3.59	18.52
11	学歴	6	− 58.99	28.04	20	職業	8	− 37.61	1.56	104	目的地	6	7.13	10.72
25	居住年数	5	− 25.59	33.40	38	性別	3	− 16.10	21.51	106	職業	8	8.65	1.52
33	性別	3	− 19.13	6.46	43	来館経路	6	− 13.13	2.97	108	年齢	9	10.36	1.71
84	来館手段	8	1.28	20.41	47	学歴	6	− 10.92	2.21	109	時間帯	3	10.84	0.48
95	時間帯	3	4.09	2.81	107	時間帯	3	11.53	22.45	110	来館経路	6	14.56	3.72
111	来館経路	6	10.32	6.23	110	目的地	6	15.08	3.55	112	所要時間	10	14.80	0.24
113	曜日	7	25.43	15.11	112	所要時間	10	17.57	2.49	113	学歴	6	16.51	1.71
114	目的地	6	26.60	1.17	113	来館手段	8	24.44	6.87	114	来館手段	8	16.65	0.14
115	所用時間	10	31.56	4.96	115	曜日	7	51.78	27.34	115	曜日	7	24.43	7.78

数の組合せ（−298）が第2位である。

以上の3変数についてみる限り，来館者の基本的属性で上位に入っているものはわずかしかみられない。第6表は，3つのサービス利用率を目的変数にとった場合の基本的属性の情報量（AIC）とその順位を示している。「来館頻度」や「借出冊数」と比較し，「予約サービス」と関連をもつ属性はわずか2変数のみとなっている。属性のうち，「来館頻度」では「職業」が，「借出冊数」と「予約サービスの利用経験」では「居住年数」が第1位になっている。また，「性」や「年齢」，「学歴」などの利用者自身の属性変数は，目的変数との関連がみられるのに対し，「来館手段」，「所要時間」，「曜日」，「時間帯」などの図書館利用の様態にかかわる変数は，それぞれの目的変数とまったく独立の関係にあることがわかる。このように，利用者の基本的属性は，館内サービスの利用率に大きな影響力をもっていない。その傾向はとくに「借出冊数」よりも「予約サービス」の利用経験に強くみられる。すなわち，図書館内のサービスの利用率については，利用者の個人的特徴よりもむしろ他の図書館内の要因が強い影響力をもつことがわかる。第7表から第9表は，他の2館の分析結果を加えて，松原と比較したものである。それぞれの目的変数において，館ごとに大きな相違はみられな

第7表　「来館頻度」の上位説明変数（館別）

	順位	説明変数	カテゴリー数	AIC	DIFFERENCE OF AIC
松原図書館	1	借出冊数	8	−507.14	0.
	2	職業	8	−127.56	379.57
	3	予約サービスの利用経験	5	−119.94	7.62
	4	借出方法の困難さ	4	− 96.46	23.48
	5	本をかりた	2	− 90.01	6.45
天美図書館	1	借出冊数	8	−171.79	0.
	2	予約サービスの利用経験	5	− 76.61	95.18
	3	性別	3	− 38.50	38.11
	4	借出冊数の変更希望	4	− 31.74	6.76
	5	行事の認知（知らなかった）	2	− 29.63	2.11
恵我図書館	1	借出冊数	8	− 77.37	0.
	2	職業	8	− 63.72	13.65
	3	学歴	6	− 45.79	17.93
	4	本をかりた	2	− 45.47	0.32
	5	年齢	9	− 42.59	2.89

い。どの館においても最大の情報量をもつ要因はほぼ共通している。しかも，どの館においても，「来館頻度」に対して，「借出冊数」や「予約サービスの利用経験」の場合には，基本的属性の情報量はきわめて少くなっているのである。

4. 要　約

情報量基準によるカテゴリカルデータの解析によって，図書館サービスの利用しやすさ(Accessibility) に影響を及ぼす諸要因を検索し，来館者の特徴が Accessibility にどの程度の影響力をもつかを考察することが本稿のねらいであった。分析の結果は，次の3点に要約できる。

第1に，来館者の特徴をみる限り，図書館システムの利用者は住民すべての層におよんでいるとはいえない。住民と利用者の間には，性や年齢，学歴による差がみられるのであり，この点では市民図書館のよりいっそうのサービスの充実が求められよう。本稿の分析は来館者のデータに基づくものであり，住民の図書館利用の状況を知るためには限界がある。その

第8表「借出冊数」の上位説明変数（館別）

	順位	説明変数	カテゴリー数	AIC	DIFFERENCE OF AIC
松原図書館	1	来館頻度	7	−481.32	0.
	2	本をかりた	2	−377.77	103.55
	3	“かわちもめん”の利用経験	5	−292.28	85.50
	4	借出方法の困難さ	4	−219.13	73.15
	5	予約サービスの利用経験	5	−205.14	13.99
天美図書館	1	来館頻度	7	−172.49	0.
	2	本をかりた	2	−118.23	54.26
	3	“かわちもめん”の利用経験	5	− 93.36	28.87
	4	予約サービスの利用経験	5	− 74.37	18.99
	5	かりていた本をかえすため	2	− 65.20	9.17
恵我図書館	1	来館頻度	7	− 74.48	0.
	2	本をかりた	2	− 66.69	7.79
	3	予約サービスの利用経験	5	− 60.69	6.00
	4	“かわちもめん”の利用経験	5	− 59.23	1.46
	5	かりていた本をかえすため	2	− 49.53	9.70

ため，図書館の非利用者層，とくに低学歴層や高齢者へのサービス拡充をはかるためには全住民を対象とした調査研究を行い，システムの Accessibility をさらに高めていく必要があろう。

第2に，来館後のサービス利用率の分析によって，「借出冊数」や「予約サービスの利用」に，来館者の基本的属性がほとんど影響力をもたないことが示された。一方，「来館頻度」は，来館者の就業状況によって大きく規定されながらも，来館を阻害する大きな条件と考えられた所要時間や来館手段，曜日や時間帯との間にはほとんど関連がみられなかった。このような結果が導かれた主要な原因は，松原市民図書館のサービス網がきわめて充実していることにあると考えられる。すなわち，いつでも，どこでも利用できる容易さが，図書館利用の大きな壁を取り払ったとみられるのである。ただし，このようなシステム化による Accessibility の増大を明らかにするためには，多くの他のシステム化の事例や単館の事例との比較研究が必要である。

第3の結果は，「来館頻度」と「借出冊数」と「予約サービスの利用経験」の間にきわめて大きな関連がみられたことである。この結果は，「利用頻度の増大→借出冊数の増大→予

第9表　「予約サービスの利用経験」の上位説明変数（館別）

	順位	説明変数	カテゴリー数	AIC	DIFFERENCE OF AIC
松原図書館	1	“かわちもめん”の利用経験	5	−253.48	0.
	2	借出冊数	8	−182.18	71.30
	3	行事の認知（知らなかった）	2	−115.51	66.67
	4	来館頻度	7	−106.25	9.26
	5	本をかりた	2	− 96.22	10.03
天美図書館	1	“かわちもめん”の利用経験	5	− 89.97	0.
	2	来館頻度	7	− 67.22	22.75
	3	借出冊数	8	− 57.44	9.78
	4	行事の認知（知らなかった）	2	− 51.61	5.84
	5	本をかりた	2	− 43.06	8.55
恵我図書館	1	借出冊数	8	− 63.53	0.
	2	“かわちもめん”の利用経験	5	− 58.02	5.51
	3	行事の認知（知らなかった）	2	− 51.32	6.70
	4	特集コーナーの認知	3	− 40.99	10.33
	5	来館頻度	7	− 40.59	0.40

約サービスの利用増大」という関係の設定がかなりの妥当性をもつことを示している。それと同時に，「借出冊数」や「予約サービスの利用経験」の説明変数リストにもみたように，「貸出サービス」と「予約サービス」の2つのサービス活動は，それ以外のサービス活動（図書館の冊子刊行や行事の開催など）とも大きな関連を有していた。つまり，図書館内の貸出以外のサービス活動もやはり予約制度をはじめとする貸出サービスを軸として展開されていると考えらるのである。その意味では，貸出サービスの充実（蔵書の質と量，貸出方法，資料提供の速応性等の検討）が，利用者の Accessibility を高める最優先の問題であるといえる。

〔注〕

1) 『中小都市における公立図書館の運営』日本図書館協会　1963。
2) 『市民の図書館』　日本図書館協会　1970。
3) 同書，96頁。
4) 『図書館用語辞典』（角川書店　1982）によれば，「図書館システム」(library system) とは，「特定の地域のすべての住民に等しく図書館サービスを行うために，複数の図書館・サービスポイントが共同活動を進める組織のこと」（同書，452頁）である。また，そのシステム成立のメルクマールとして，(1) 資料の収集（選択），整理，保管の集中化　(2) 貸出し，返却，リクエストサービスの組織化　(3) レファレンスサービスの組織化　(4) ＰＲ活動の集中化の4点があげられている。
　一方，「図書館ネットワーク」については，「図書館システム」との対比の上で次のような定義がなされている。「市町村内の1図書館系列を，太陽系というように図書館系（システム）と呼び」，「大学等の別の図書館系やその他の自治体の図書館系および県立図書館との連絡，協力体制を図書館連絡網（ネットワーク）と呼ぶことにしたい。」（図書館問題研究会用語委員会『みんなの図書館入門（用語篇）』図書新聞　1981）
5) この定義は，『みんなの図書館入門（全域奉仕篇）』（図書館問題研究会全域奉仕編集委員会著，図書新聞　1982）による。その場合「有機的な関連をもった1系列の図書館サービスポイント」であるからには，当然，『図書館用語辞典』（前掲）に示された『複数の図書館・サービスポイント』であることが前提となる。
6) この種の調査では，文部省の「社会教育調査」が4年毎に全国的規模で実施されているし，各年度毎に『図書館白書』，『日本の図書館』が刊行されており，その実態がかなり正確に把握されている。また，図書館における各種の業務サービスに関する調査として，常盤繁・糸賀雅児「公共図書館利用サービスの実態—1980年全国調査結果—」（社会教育学・図書館学研究第5号　東京大学社会教育研究室　1981）がある。さらに，その発展研究として，糸賀雅児「公共図書館の活動指標と図書館内的要因の分析」（図書館学会年報，vol. 28, No. 1, 1982）がある。この研究は，図書館のサービス活動の指標（貸出密度，貸出便益など）に影響を及ぼす図書館内的要因の分析に，各種の多変量解析の手法を適用している。
7) 森田恒子「公共図書館の潜在利用者に関する一調査」（図書館界 vol. 9, No. 2, 1957），総理府「読書・公共図書館に関する世論調査」（月刊世論調査　1980）などがある。
8) 古くは，吉武泰水他「公共図書館閲覧者の実態」（季刊図書館学 vol. 2, No. 4, 1955），中村仁「公共図書館と成人教育」（『教育時報』87　1955），北島武彦「公共図書館利用者調査」（『図書館学会年報』vol. 6, No. 2, 1959）などがある。最近では，森耕一「貸出利用の実態調査」（図書館学会年報 vol. 21, No. 7, 1975）や森耕一他「市立図書館の利用に関する調査」（現代の図書館 vol. 19, No. 7, 1981）があり，前者は貸出利用と来館頻度の関係をみたものとして興味深い。さらに，1自治体内の中央館，分館についてのインテンシヴな調査研究として，大阪大学人間科学部社会教育論講座『図書館利用に関する調査報告(1)—吹田市立図書館の場合—』（1978），同『ニュータウンの中の図書館—吹田市立千里図書館の利用者調査—』がある。
9) 栗原嘉一郎「公共図書館の設置計画」（長倉康彦他『建築計画学3地域施設教育』丸善　1975），文部省社会教育局社会教育課『公共図書館サービスのネットワークの整備に関する調査研究報告書』

1980。

10) 加藤一英「Peter Karstedt の図書館歴史社会学」(図書館学会年報 Vol. 21, No. 1975) はその原因について最初にふれている。

11) Evans, E., Borko, H., & Ferguson, P. Bull. Med. libr. Assoc. 60 (1), Jan. 1972. Review of criteria used to measure library effectiveness.

12) 松原市民図書館『松原市民図書館活動報告1983年度』1984。

13) 松原市民図書館，前掲書。

14) 調査主体は，大阪大学人間科学部社会教育論研究室であり，本稿のデータはその調査結果に基づく。

15) 情報量統計については，坂元慶行他『情報量統計学』共立出版 1983を参照。とくに分割表モデルの情報量基準については，坂元慶行「カテゴリカルデータの解析」(数理科学，No. 203, 1981, 24～29頁) ならびに坂元慶行「カテゴリカルデータにおける変数選択プログラム — CATDAP を中心に一」(総計数理研究所彙報，第28巻 第1号 1981 135～155頁) が詳しい。本稿で用いた解析手法は，坂元による分割表解析の方法であり，計算には坂元が作成した CATDAP 1 プログラムを利用した。

16) 以上の結果を再検討するため，各図書館について，3つの利用率を外的基準として数量化Ⅱ類による分析を行った。説明変数に基本的属性を選択した場合と，AIC によって選択した上位変数を用いた場合との2種類の計算を行った結果では，AIC により選択した変数を説明変数とした場合の方がよりよい判別結果を得ている。

CONSIDERATION IN ACCESSIBILITY OF PUBLIC LIBRARY SYSTEM

Yoshihiro YAMAMOTO

Since the 1970s', public libraries in Japan have rapidly developed. But, it is a question whether they are libraries easy to access for people. In the present paper, we shall try to consider the accessibility of library according to the investigation into the users of Matsubara Civic Library in Osaka.

We can get many precedents of user investigation. They have many practical problems unsolved on following points. 1. Inaccurate sampling, 2. Insufficient analysis on user characteristics, 3. Lack of a theoretical framework on library use. So, we adopted the concept of accessibility which is one of criteria of library effectiveness. Accessibility has two aspects. One is physical access and the other is user access. In this paper, we analyzed user access, to what class of user a given service is available and what factors of user and library influence accessibility to a variety of services. As scale of accessibility, ratio of uses to three services (Times of library use, Number of books borrowed in a month, Ratio of uses on request service) were set up.

Matsubara Civic Library System was chosen as the subject of the study. We obtained data from the complete enumeration to library user (over ten years old) in a week. After the analysis of AIC (Akaike Information Criteria) on all explaining variables to three explained variables, we obtained following results. First, the strongest correlation was observed amongs three explained variables. Second few characteristics of user accounted for "ratio of uses on request service" and "number of books borrowed". On the other hand, "times of library use" was related to occupations of user.